

特集

関東支部会の報告

「天文、宇宙を魅（見）る」～映像教材をつかって～

塚田 健（平塚市博物館）

1. はじめに

去る 2011 年 11 月 14 日（土）、埼玉県立春日部女子高等学校の地学室をお借りして、天文教育普及研究会・関東支部会を開催しました。テーマは、「天文、宇宙を魅（見）る」～映像教材をつかって～。講演会などには春日部女子高校の生徒さんも数名参加され、あわせて 27 名の参加があり、休憩時間には会員の方が用意された機材を用いた太陽観察なども行われとしました。

2. 一般発表

前半はテーマに関する発表も含めた一般発表が行われました。全部で 7 件の発表がありましたので、以下に簡単にご紹介します（敬称はすべて省略させていただきます）。それぞれの詳細については、別途本誌への投稿があると思いますので、そちらをご参照ください（最後の発表＝筆者の発表については『天文教育』誌 2011 年 11 月号をご覧ください）。



図 1 研究発表会の様子

○「観望会スタイルの特徴と課題」（観望会の現場から…）

田中千秋（関東天文協会、神津牧場天文台、こども星見隊）

観望会を実施する団体やスタイルなどで観望会を分類し、それぞれの特徴や運営・活動方法などについて、田中さんが実際に所属されている団体（関東天文協会・こども星見隊、鴨川市に天文台を作ろう会）の例を交えつつ、各スタイルの長所や短所などの比較や観望会継続の課題についての問題提起、観望会時の工夫などの発表がありました。

○「科学成果の映像化とその有効活用について」

波田野聡美（AND You）

ブラックホールに関する研究の記者発表で使用される動画の作成について、動画の紹介とその製作過程、また実際に動画が流されたときのメディアの反応について詳しく紹介がありました。

○「対象より目的だ」「電波望遠鏡の形」

佐藤明達

二件連続で発表していただきました。

一件目は、「星に親しむ→天文学が好きになる」という迷信がありこの点が不満であること、天体観望会は星に親しむためにあるもので天文学には直結しないということ、もっと天文学をしっかりと伝える必要があるというお話でした。

二件目は、電波望遠鏡の形がなぜパラボラなのか、なぜ球面ではダメなのか、その考察についての発表でした。

○「国立天文台科学映像クリエイタ養成コース修了作品の紹介」

平井明（国立天文台）

国立天文台で実施している科学映像クリエイタ養成講座の紹介とその修了生の活躍の様子（3年間で26名が修了、映像制作業に携わっているのは内3～4名）、実際に修了生が製作された映像17作品のうち数作品のダイジェスト上映が行われました（本編はYouTubeで視聴可能だそうです）。

○蓄積型カラービデオカメラの可能性

石井馨（日食情報センター）

近年登場した蓄積型カラービデオカメラについて、その仕様や機能、活用法についての紹介があった。感度をすると冬の天の川も写り、都内でも星団星雲も写るということで、観望会の待ち行列での補助説明用や初心者への星雲星団案内用、光害地での星雲星団案内用、観望会で天候が悪かったときの映像用、動きのある天体の画像教材作成用など幅広い活用ができる可能性があるという話でした。

○太陽スペクトルを魅（見、観）る」

坂江隆志（埼玉県立浦和西高等学校）

高校の物理の教科書に載っている太陽スペクトルの実物を見せたいということから、分光器の製作の過程、これからどう応用していくかという課題について発表があった。近紫外域から近赤外域までの幅広い、かつ高解像度のスペクトル画像は圧巻でした。

○「アニメ映像を活用した短時間でもできる天文学普及」

塚田健（平塚市博物館）、福士碧沙（ワオ・コーポレーション）

1分間のアニメーションを利用した、天文学の1トピックを解説する動画の活用に関する提案と具体的な製作過程、実際にその映像を活用した際の反響について発表があった。

3. 映画上映会と講演

後半では、プラネタリウム映像番組「HAYABUSA BACK TO THE EARTH（帰還バージョン・ディレクターズカット版）（以下、HBTTE）」の平面版の上映と、その作品の監督である上坂浩光さんの講演が行われました。

上映は始まる前に「HBTTE」を見たことがあるかどうかを参加者の方に伺ったところ、意外にも見たことある方が少なかったのが印象的でした（関東近辺のプラネタリウムでは上映している館がかなりあるので…天文教育普及関係者といえども、プラネタリウムにはあまり行っていないということでしょうか？・笑）。本来はプラネタリウムでの投影用、すなわちフルドーム作品として制作されたものですが、平面映しのプロジェクターでも迫力ある映像を見ることができました。

講演では、当初全国で2館でしか上映されていなかったHBTTEが徐々に広まっていく過程、帰還バージョンの製作、平面版映画の上映の動きなどについて、監督ならではのお話をお聞かせいただきました。HBTTEはプラネタリウムでの観覧者数が70万人超、映画館での観覧者数が62館で9万5000人超、DVD&BDの売り上げが2万本と、非常に人気を博したとのこと。製作過程についてのお話では、監督の想い（「最初はプロジェク

トX風にしようとしたが、JAXAの物語にすると、一般の人には受け入れられないのではないかと考えた。そうではなく、はやぶさと見てあなたの物語にしたかった」とのこと)やCGを作る際の技術的なお話までしていただきました。製作時の苦労や帰還バージョンを作る際の壁、それをどう乗り越えてきたかなど、HBTTEの製作自体が「はやぶさ」のプロジェクトに匹敵するような印象を受けました。結びには、英語版HBTTEの制作・上映のお話と、地方の方からのHBTTEを見た感想のお手紙、YouTubeにアップロードされたHBTTEのエンディングテーマソング(手紙を出された方の息子さんが歌っている)の紹介がありました。



図2 講演会の一コマ

4. おわりに

今回の関東支部会は「映像」をテーマにして行われました。HBTTEはもちろんのこと、文字でもなく写真でもない、動画(音楽・音声なども含む)の威力を改めて知ることができました。製作が難しいためか、プラネタリウムなどの映像作品を除けば、まだまだ天文教育普及活動において映像が活用されている例は多くはありませんが、徐々に増えてきていると思います。理解向上や興味喚起などに、これまで以上に様々な活用が考えられる

と思います。

最後になりましたが、今回の支部会で会場を提供して下さった埼玉県立春日部女子高等学校さんをはじめ、準備に携われた本会関東支部委員の皆さん、そして参加して下さいました皆さんに御礼申し上げたいと思います。ありがとうございました。

塚田 健

以上の発表のうち、個々の内容は「特集：関東支部会報告 ー天文、宇宙を魅(見)るー」のページに掲載してあります。

尚、「アニメ映像を活用した短時間でもできる天文学普及」【塚田健(平塚市博物館)、福士碧沙(ワオ・コーポレーション)】は前月号「天文教育 2011 年 11 月号 (Vol.23 No.6)」に掲載されていますので、あわせてご覧ください。

飯塚礼子(関東支部長・編集委員)